

白き雲に見え隠れする美しき白馬岳・・・

なぜに我が道を拒むのか・・・

とわに想う、我が心が通ずる日はいつの日か・・・

2000

5/3 ~ 5

メンバー

大塚賢一 45才

福迫順一 37才

北アルプス
白馬連峰
山スキーツアー



Northern Alps Shirouma mountain range

今シーズン最大の試みである「北アルプス白馬連峰山スキーツアー」をプランニングして。蘇武岳、氷ノ山、中央アルプス・・・とトレーニングをこなし、インターネット、雑誌から資料を取り寄せ、地図からイメージトレーニングと万全の状態に挑んだプランであったが、それでも白馬連峰の大自然と手をつなぐことを拒まれ風速30m以上の強風に吹き飛ばされそうになり、やむなく「撤退！」した。

が、この3日間の経験はとても貴重なものとなり我が人生の1ページに刻まれた。

プランでは、

3日 榎池ゴンドラ-(シール)-天狗原-(シール)-白馬乗鞍岳-(シール)-小蓮華岳-(アイゼン)-三国境-(アイゼン)-白馬岳-(スキー)-白馬山荘(泊)

「アカン、風のリズムが変わった、これ以上は前進不可能！、撤退！！」
「スキー板2枚合わせ固定！、ピッケル・アイゼンで身柄確保！、吹き飛ばされるよー！」

4日 白馬山荘-(大滑降)-長池-(アイゼン)-鉢ヶ岳-(シール)-雪倉岳-(シール)-朝日岳-(大滑降)-蓮華温泉(泊)

5日 蓮華温泉-(シール&アイゼン)-白馬乗鞍岳-(大滑降)-天狗原-(大滑降)-榎池ゴンドラ

エスケープルートとして、榎池小屋に停泊、天狗原から蓮華温泉に滑降、翌日に雪倉岳、朝日岳をアタック、と抜群のツアースキープランを立てていたのだが・・・。

北アルプス白馬連峰撤退！、そのドラマが今始まる・・・。

時間的余裕

ときおりカミナリの鳴るいやな音の中を現地入りした。白馬連峰は分厚い雲に覆われて全く見えない状態である。時間の余裕があるので長野五輪のスキージャンプ台を見学する、真上から見たが恐怖感は無かった。パラグライダーと同じで踏み切りと着地が難しいであろうと思うしだいである、あとは浮遊のテクニックのみだろう。

ヒョウが降る

明日に備えて小日向の露天風呂で身体をいやすが、その時に急に雲行きが怪しくなりいきなりヒョウが降りだし吐く息は白く・・・山は大荒れであろう、どうも寒気が入っているせいで不安定だ、明日からの入山に迷いが生じる。

隠れテントサイト

どこにテントを張ろうかと右往左往すること1時間余り、樽池で雨もしのげる抜群のテントサイトを見つける。すぐそばには樽池温泉もありで最

高の場所である。

テント設営中に雨が本降りとなり明日の予報も北部地方はぐずつくとのことで、明日からの入山は中止にする。

八方尾根グレンデ～丸山ケルン

朝方雨はあがっていたが、



ガスに飲まれたれた白馬三山

やはり入山予定の白馬乗鞍岳、小蓮華岳、白馬岳は全くに雲の中で見えない状態なので「今日は八方尾根から唐松岳に登ろう」と車を移動する。

サブザックにアイゼン、シール、オールウェザー上下、行動食を装備してゴンドラ、リフトと乗り継ぎ最高到達地点1720mまで運んでくれる。そこからアイゼンでスキー引っ張りで、第一ケルン、第二ケルンと、どんどん登山者を抜いて高度を稼いで行く、なにせ装備が軽装なのですこぶる軽快である。

3年前に加藤氏と来た白馬連峰であるが、今日は小日向のコルあたりしか見えない、上部はやはりガスに包まれている。あのころのツアースキーのつらかった出来事が走馬燈のごとくに思い出される。

第三ケルン2000mあたりからうっすらとガスのお出迎えである、にも関わらずこの唐松コースは非常に登山者が多い。途中にBCを張ってなにやらトレーニングをしているパーティー、キレット縦走のヘルメットパーティー、ごく一般の五竜岳縦走のパーティー、また重装備の山スキーパーティーなどさまざまである。それから比べると我々のお粗末な装備は「山をナメとんのか!」としかられそうな貧弱な装備である。

そうこうしているう



白馬三山をバックに



第3ケルンよりダケカンバ林へ大滑降



丸山ケルンより滑降ルート

ちに丸山ケルンの上部あたりから本格的にガスりだしこれ以上は行っても下りが滑降出来ないと思い、唐松小屋まで行く登山者を横目にスキーを履き大滑降となる。しかしガスっているので不安ではあるが、数多い登山者がマーカーとなってコース

を外れる心配はなかった。

100mほど下るとガスが全くなき快晴である。これが山の恐ろしいところでもある。

この2月にニュージーランドのボーダーが雪崩れに巻き込まれた第三ケルンの急な北斜面を一気に滑り込みダケカンバ群生林へとたどり着く、そこには真っ白の雷鳥が出迎えてくれた。

軽く昼食を済ませ八方山ケルンまで板を運ぶが、ものすごい腐れ雪で板を履いていても膝が埋まる所が数カ所あった。もしこんな所で転倒したら完全に起きあがれないのでは?と思った。

八方山ケルンからは少々担ぎで、再び第一ケルンに向かって40度以上の急斜面を一気に滑り込んで、最終リフト到達点である。

今日は福迫氏にゲレンデテクニクを教わろうとリフトの日券を買っているの、上から下まで4~5本滑るが「なんでこんなにコブがあるねん?」、私はコブは全くの苦手なので(何故なら山はコブなど無い)全然練習にならないし疲れるばかりである。かたや福迫氏はまるで雪上で魚が

跳ねているかのように縦横無尽に滑りまくっていた。(オイオイ、明日にこたえるぞ~)

5/4 晴

樽池~天狗原

8:00 ゴンドラに乗り、すでに張り付けていたシールで登山開始である。シラビソの森を越え、ダケカンバの森を越えて進む。天気は快晴であるが山頂付近は少々ガスり気味である。

9:11 2030m 8度 正城大学小屋に到着



延々とシール登山が続く

ここまでのルートはいくつも林道をコンバスを片手にショートカットのシール登山である。アオモリトドマツの木々に囲まれて天狗原をどンドンと登って行く。今日は天気もいいので天狗原までのスキーヤーを乗せたヘリコプターがバリバリと巡回している、我々にはうるさくてしょうがない。

い。

後を振り返ると下の方で福迫氏がザックを降ろして座っているではないか!、「何しとんねん?」かかると肉刺が出来た」と言って処置をしているとのことであった。そう言えば彼はシール歩きは蘇武岳での経験しかないのも無理もなからう。ここでのシール縦走はたとえ氷ノ山であろうが足元にも及ばない距離とテクニクがいるのである。

10 : 12 2350 m 7度 天狗原到着



天狗原で小休止

この天狗原は昨年9月にX-Adventureレースで夜の8時から蓮華温泉から白馬乗鞍経由で登山したのだが雪のない状態とでは全くに形相が違うのでまるで別物である。

ここから見る白馬乗鞍の大斜面はとんでもなくデッカイ壁である。先行パーティーがまるでゴマ粒のようにしか見えない。

い。

天候は時おりすごい速さでガスが流されて行く、まだ安定しているとは言い難い状態である。この白馬乗鞍を登りきれば今日の全行程が見えるはずなのだが・・・。

小休止のあと再びシール登行で氷ノ山の北壁の何十倍ものデッカイ急斜面を山側にキックターンを繰り返しながら登って行く。しかし、雪質が硬くてシールも斜面に対して3cmほどしかかからないので体重移動に対して高度なテクニックが要される、そうでなければ谷側の板がずり落ちてしまうのである。

振り向くと福迫氏もだんだんと視界から遠くなっていく、悪戦苦闘している様子がうかがえる。

最初からクトーを着けていればよかったと反省する。この急斜面の硬い雪では足場確保が難しく途中装備変更は滑落の危険があるので出来ない状態だ。

白馬乗鞍～小蓮華山

11 : 14 2437 m 6度 白馬乗鞍山頂到着



小蓮華山はまだまだ遠い

ものすごい風である。雲がすぐ真上にすごいスピードで流れている。しかし、ここから見える小蓮華山の容姿はなんとも言えないくらいに真っ白でとんでもないほどにデッカイ。

体感気温は軽く氷点下で早速岩陰でフル装備に身をまとう。15分ほど経っても福迫氏がやって来ない。

ひょっとして山頂の祠方面に行ったのではないか？と思い、壺足で探しに行く・・・的中であった。私もとりあえずこの山頂からまだ先に行けるか行けないかを確認したかったので待たずに登ってきたのであるが、彼はやはりこの急斜面のシール登行に相当悪戦苦闘したようで途中から壺足でスキー引っ張りで先行者の壺足トレースをたどって来たと言っていた。

12 : 09 白馬大池到着 装備変更アイゼンでスキー引っ張り

乗鞍山頂から白馬大池への下りはシールを着けていても下れるのだが岩とハエマツの間の雪を探して、時にはまたいで大変である。斜面によって数メートルも積もっているかと思えば全くに積もっていないところもあるのだから冬の大自然の地形は夏山からみると全くに予想がつかない。

3年前に来たときは白馬大池山荘の屋根が見えていたのだが今年はずべてが雪の中で何処にあるのかわからない。またこの大池は名の通りのものすごくデッカイ池なのに全て氷で埋め尽くされて雪の吹き溜まりになっているのであろう、ものすごい雪尻が出来て雪崩れていた。



しかし、学生のパーティーが強風の中、数張りテント設営して頑張っている、その中には可愛い女の子もいるではないか、「こんにちわ、どちらまで?」、「白馬です」、「私たちはこの強風を負けて軟弱なので今日は断念しました」、「そうですか、我々もこの小蓮華を登ってみてからの判断です」。

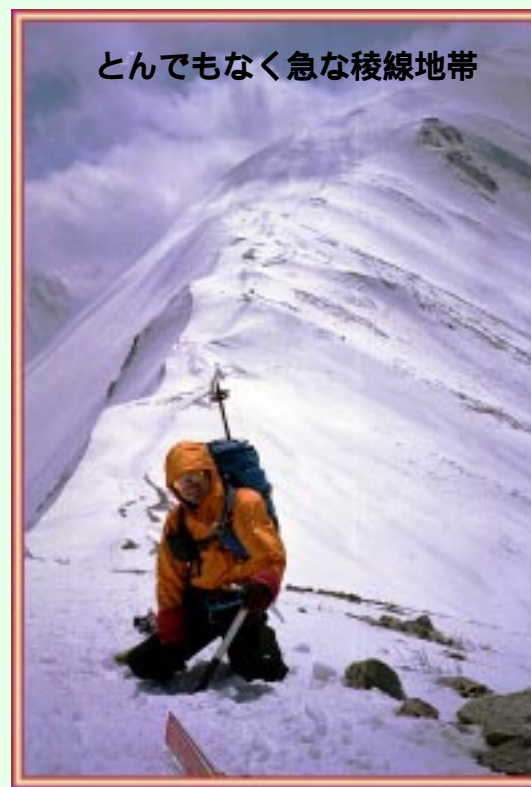
眼前に現れるは戦意喪失するようなものすごい急斜面の雷鳥坂が出迎えてくれている。装備変更の途中で福迫氏の手袋を吹き飛ばされ全力疾走で何とか無事に取り押さえたのはよかったが、ものすごい息切れである。それもそのはず2500m付近の来薄の酸素では当たり前である。本で読んだが6000mでは完全な脳の酸欠で「死」である。

さあ、いよいよ小蓮華山へつながる40度近い雷鳥坂への急斜面への登頂開始であるが、真上からの強風に幾度となく前進を阻まれ、いきなりの突風に飛ばされないようにまるで亀のように身体を低くすること数十回。私は上を見上げた瞬間にいきなり雪塊が顔面を直撃して目の下を切ってしまった。サングラスをしていなかったら大事である。こういう時はやはりゴーグルが必須である。

13:07 2769m 2度 小蓮華山頂到着

なんとか雷鳥坂に登り始めるが風は一向に衰えを見せない。空はピーカンに晴れ渡っているのに・・・。

しかし、今回プランニングした白馬岳、雪倉岳、朝日岳がまるで手招きで



強風にしゃがみ込む

もつかの間とんでもない突風にスキー板も悲鳴をあげてまるで凧のようにあおられその度に身体がバランスを崩す。「大丈夫か〜!」と大声で側にいる福迫氏に伝えるがその声も唸るような風の音にもみ消されてしまう。

今までは強風が息をしていたリズムを読んでなんとか進んでいたのだが、いつしか我々を拒むかのようにリズムも無くなり吠えるような音で、これ以上は全くの前進不可能となる。

『撤退!、撤退!、ストックザック固定、ピッケル装備、スキー板2枚合わせ固定!』と緊迫状態の中で慎重に装備変更である。

ここから小蓮華まで帰るのは非常に危ない吹きさらしの稜線地帯なのでひとたび吹き飛ばされれば完全に命は無いだらう。ピッケルとアイゼンの3点支持で幾度も止まりながら、突風に耐えしのぎ亀のようにゆっくり

もしているかのように美しく雄大に姿を現してくれた。本当に口では言い表せないような白き輝きを発しオーラを漂わせている。

これ以上は無理だ!「撤退」

小蓮華から三国境へ向かう途中に幾度も幾度も、今度は下からの強風に阻まれる。後から付いてきていたスキーザック固定の山スキーヤーは私が見た瞬間に信州側の雪尻に5mほど吹き飛ばされてあわや大惨事となる場所だった。すぐさま引き返したようだ。

我々はスキー引っ張りなのでまだまぬがれたようだが、それ

ゆっくりと身をかがめて、まるで歩伏前進をしているようだった。

小蓮華山～白馬乗鞍

なんとか小蓮華山まで後退したが、スキーを持っているのにこの素晴らしい斜面を強風にさいなまれやむなくアイゼンでスキーを引っ張りながらの下山である。

白馬乗鞍への登り返しは八エマツ帯と岩稜地帯なのでスキー板をザック固定で登らねばならない、しかし今までの緊張感が疲れと化し、また2500m以上で酸素も希薄なので10歩登っては「ハアハア」と止まりの連続であった。

白馬乗鞍～天狗原大滑降



白馬乗鞍

白馬乗鞍を滑り終えて

この急斜面はものすごいダイナミックであるが、時間も16時を回っているので気温の低さと強風とが重なってものすごいクラスト状態の雪質になっている。エッジを回そうとするがなかなか思うようには事がはかどらない。自分のトレースの後を見るとまるで南極砕氷船が氷をバリバリと割って進んだ後のようだ。幾度も転倒しながらなんとか天狗原までの大滑降を楽しんだ？。

天狗原～梅池山荘大滑降

ここまで降りれば高度の2200mとなり雪も湿質でなんとか回

せるようになり「ホッ」としたところだ。しかし疲れはピーク近くになり太股が悲鳴をあげている。

営業してない！

今日はこの梅池山荘で泊まって明日に再びアタックをかけるつもりでいたのに・・・去年まで営業していた小屋がやっていないのである、雪は去年よりはるかに多いというのに。

強者山スキーヤーとの出会い



強者山スキーヤーとの出会い

歳は58才くらいの山スキーヤーと梅池山荘手前で出会ったのが、サヨナラ逆転満塁ホームランと言っても大きさではないくらいの素晴らしいものであった。

彼は、午後から入山してこの梅池山荘で泊まり明日に三国境から雪倉岳に滑り込み、蓮華温泉までの滑降を楽しみ、途中休憩で趣味

の絵筆を取り出し大好きな雪山を描くといったロマンチストである。

営業していないとわかれば我々の非常装備もツェルトのみでシュラフ無しなのでゴンドラまで下るしかないので気持ちを入れ替えて再び彼と一緒に滑り降りる。しかし、彼はさすがは山スキーヤーといったもので滑りやすい所は一切滑らなく、常に木々の間を縫うように滑りまくるので我々はついて行くのがやっとであった。



ブロッケン妖怪

ブロッケンの妖怪 現る

ゴンドラまで下るが、時すでに遅しで17時を回っていて運行していない状態である。

彼が「大丈夫や、ワシの車は第二ゴンドラに置いてあるから、そこまではゲレンデ利

用でなんとか滑れる」と言って、そこからは我々の車まで積んでもらうという、とてもありがたき親切である。

と、その時ゲレンデがうっすらガスに包まれてきた。福迫氏が「あれあれ」というので前をよく見ると、な、な、なんと丸い小さな虹の中に我々二人の陰が映っているではないか！、まるで後光が射しているかのようである。手を上げると同じように反応する・・・まさしく「ブロッケン現象」である。うわさには聞いていたが実際にこの目で見たのは初めての事であった。しかも1分ほどの貴重な出来事であった。

大滑降を終えて

乗鞍からものすごい距離をずーっと滑りばなしの大滑降も幕を閉じて二人とも充分に大満足で両足ともパンパンで疲れもピークに達して充実感一杯であった。

駐車場までの200mほどの距離を板を担ぎながら、彼と山スキー談義に花が咲いた。なんと彼は50才から4年連続で山スキーヤーの憧れのコース・・・「日本オーートルート」を縦走していると聞き頭が下がる思いで一杯であった。このコースは立山から槍が岳までの超ロング縦走コースでテント、シュラフ装備でこなさねば完走出来ないのだ、それを彼は立山から槍が岳、槍が岳から立山へと4年連続こなしているのだ。彼の容姿からはとても想像がつかない。

私の夢もこの「日本オーートルート」縦走なのだが今の力量ではまだ無理と実感する。もっとトレーニングと経験を積まなければ・・・。

露天風呂にて

今日の疲れを癒すために恒例の樽池温泉の露天風呂で福迫氏と「今日は引き返してよかったなあ」と二人して一日を振り返りながら大満足の汗を流した。性も根も疲れ果て「明日は帰ろう」となる。



自分では完璧なプランニングだと思っていたのだが、落とし穴が一つ・・・何故事前に樽池小屋に電話を入れてなかったのか悔やまれる。営業していないとわかっていれば小蓮華山から蓮華温泉に滑り込んで、次の日に雪倉岳、朝日岳とアタックしていたのにと・・・、明日は今日よりいい天気になるのがわかっているが、今の疲れからして到底今日の行程を再び行う元気は残っていない。しかしそのおかげで強者山スキーヤーとの「一期一会」があり、「ブロッキン現象」にも遭遇したりすごいプレゼントを授かった。

悔しさと満足感が入り乱れて頭の中が交差している。

5/5 快晴

BC 撤収、帰宅準備

やはり天気予報通り夜明けから快晴の一日を迎えた。毎朝稜線付近がガスっていたのだが今日は雲一つない青空に包み込まれ朝日が雪山に溶け込み金色に輝き目ざめ始めている。

モーニングコーヒーを片手に見入っていると、昨日までの疲れも吹っ飛び自分の鋭気が山に吸い込まれて『早く登ってこい!』とささやいているようだ。

早々にテントを撤収して帰宅準備も整い白馬駅方面に車を走らす。

再び八方尾根

どうにも天気良すぎて朝の『早く登ってこ



い!』の誘言葉がどうにも頭から離れないので、ゲレンデ好きの福田氏に「疲れてはいるが、今から八方尾根のゲレンデ遊びをしよう、と言ったらするか?」と聞くと、「そりゃーしますよ」の返事なので、「そしたらもう一度、八方尾根のゲレンデから唐松岳にアタックしよう」と意見が一致したのでそのまま八方尾根の駐車場に入り早速に山服に着替えてアタックザックに必用具を詰め込み朝一番のゴンドラに駆け込む。

今日は天気も極上となってゲレンデスキーヤーの数も相当数で、また登山者の数も多い。私も昨日までの疲れはどこへやらで、小学校の遠足の気分でウキウキである。

八方尾根～丸山ケルン

2日前の天候とは打って変わったのドピーカンで白馬乗鞍、小蓮華、三国境、白馬岳、杓子岳、鑓ガ岳、天狗の頭、不帰のキレット、唐松岳、五竜岳、鹿島鑓相似峰の白馬連山すべての山々が見渡せる。気分は今日の天気以上にハイテンションである。

3年前に加藤氏と縦走したコース・・・白馬乗鞍、小蓮華、三国境、白馬岳、杓子岳、鑓ガ岳から鑓沢を滑り込み、小日向のコルを過ぎて猿倉へ、今日ははっきりと見渡せてあの時の厳しかった事が思い出される。

丸山ケルン～唐松岳

ここからは未知のルートである。唐松山荘手

前からはルートも厳しく、右側はとんでもない雪尻状態が続く、やはりこういった所はガスも無く、風も無くが最高である。ひとたび吹き荒れれば天と地の差がある。

スキーはこれから先へ持って行っても我々には滑降不可能なのでここらあたりにデボする。

半分雪に埋まった唐松の小屋は2600m付近に建っているのだが、よくまあ強風で吹き飛ばしてしまわないものだと思う。

唐松小屋から最後のピーク唐松岳への急登が始まる。唐松岳 2696 mへのピークを踏むと誰からともなくため息や歓声が谷にこだまする。

なんとも言えない素晴らしい景色が眼前に現れるのであるから無理もない。私もここで36枚1本撮りきってしまった。北に白馬連峰、北西に立山連峰、その西に穂高連峰、南に五竜岳、と360度雲一つない下での大パノラマ展望である。

ふと、不帰のキレットに目をやると、2峰、3峰に人間がいるではないか！、とんでもない雪の壁をアンザイレンで登っている。すごい人たちがいるものである、ヨーロッパアルプスの高山にアタックするとなるとあんなトレーニングをこなさねばならないのだろう。



唐松山頂 つらい登りが一気に吹っ飛ぶ

露天風呂にて



不帰のキレットをバックに

唐松岳～八方尾根ゴンドラまで大滑降

今日は2日前とは反対斜面の南斜面をトラバース気味で一気に下降である。ほんとにこのスキーは下山手段の行動には目に見張る速さがあって快適そのものである。今まで登ってきた辛さも一度に吹き飛ばしてしまう。ゲレンデを滑り込んでゴンドラまでは1時間半ほどだ、距離にして有に5kmはある。朝一番のゴンドラを7時30分に乗り込み、駐車場にたどり着いたのは14時30分であった。

ピストンではあるが一日十分に楽しめるダイナミックコースである。

最後は快晴の中で小日向の露天風呂で汗を流したあと、強行ではあるが帰姫に向かった。

PS

- ・今回の白馬縦走は撤退に終わったが、その分素晴らしい一期一会があった。
- ・最後のご褒美の唐松ピストンは素晴らしい山スキールートである。
- ・来シーズンは我々の山スキーチームみんなで是非とも完走したいものである。
- ・来週はいよいよ最後の山スキー・・・白山でFinalをむかえる。